

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	片言のソ連とびあるき 〈紀行〉
Author(s)	切明, 慧
Citation	広大言語 , 8 : 60 - 63
Issue Date	1968-12-10
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046302
Right	
Relation	



主要参考文献

- SYSTÈME GRAMMATICAL DE LA LANGUE FRANÇAISE (G. Gougenheim)
 - PRÉCIS DE GRAMMAIRE HISTORIQUE DE LA LANGUE FRANÇAISE
(F. Brunot & C. Bruneau)
 - ÉLÉMENTS DE SYNTAXE STRUCTURALE (Jean Fourquet)
 - TROIS ASPECTS DU FRANÇAIS CONTEMPORAIN (A. Doppagne)
 - HISTORICAL FRENCH GRAMMAR (Darmesteter)
 - NOTRE LANGUE (J. Marouzeau)
 - LE GÉNIE DE LA LANGUE FRANÇAISE (A. Dauzat)
 - NEGATION IN ENGLISH AND OTHER LANGUAGES (O. Jespersen)
 - A GRAMMAR OF PRESENT — DAY FRENCH
 - 文法の原理 (Jespersen —— 半田一郎訳)
 - フランス語学新考 (中平 解)
- (文責 本人)

片言のソ連とびあるき

切 明 慧

今夏、高校社会科教育研究会主催のソ連視察旅行に合流、8月3日から8月23日まで、約3週間、ソ連各地を訪れました。

ロシア語学習については、辞書もなかった一昔前とくらべると、レコード、録音テープといった便利なものができてはいますが、相対的には、まだまだ陥没しており、教育テレビ語学講座の恩恵も受けていません。そこで思い切って会話のイロハから実習するつもりでソ連にでかけました。以下片言のロシア語を使っただけの会話を思い出し、ソ連各地のうらモスクワまでの旅を訪問地順に列挙してみます。

I ソ連船ハバロフスク号で

横浜港大桟橋を午前11時に出港、早速船員や船室係、売店の売り子、掃除婦にいたるまでまず挨拶から会話の練習開始。文化係と称する映写技師に感想を求められ、動物の映画(野良犬の方が飼犬よりも自由で幸せだといった単純明快な暗示もの)がよかったという素直によるこぼ。夜になると船尾のバーで生れてはじめてコニャックを飲み、舌鼓をうちながら「コニャック 一杯」「タバコをひとつ」などを練習。その結果、なんでも「ください」という時は give me

の me に当る「ムネ」という代名詞の与格だけを使えば、もっとも簡潔に用が足せることを覚える。レストランでは専ら What is this に当る「シトー エータ」を連発、まるで幸大夫（最初のロシア語修得者といえる漂流者）にでもなったつもりで vegetable soup のロシア語から次々と料理の名前を教えてもらう。この女給さんに「タチャーナ サモイロフ（映画アナ・カレーニナの主演）に似ているよ」というと、ポット顔を赤くして「ニェート」という。この人といい、莖々としたバーのホステス？といい、まず素朴というのが船での全体的印象。船客係のワシーリーという日本語のできる人の話によると、この船の勤務には三つの徳があり、①給料がもらえること、②ことばが習えること、③お嫁さんが探せることをあげる。「夕食の用意ができましたから、レストランへおいでいらっしやい」という彼独特の日本語をきいていると、自分の使う外国語が外国人にどう響いているか身につまされ、語学教師のはしくれとして背筋に冷いものを感じる。

II ナホトカで

52時間の航海の後、ナホトカに上陸、同地の太平洋という駅から国際列車に乗り込む。車掌さんの中に極東大学英文科女子学生のアルバイトがいた。発車間際に、日本の若い人数人が、町の探索でもしようとするのかホーム続きの土手によじのぼりはじめると、この女子学生が凜然と大声一喝、英語で叱りつけたのにびっくり。このアツシャという名の少女が青いベレー、カーキ色の制服に身をつつみ、色白で小柄な美人だっただけに「ソ連女性恐るべし」との印象を覚える。更にモスクワへの空路、スチュアデスが通路上の荷物を足でバット椅子下に蹴りこんだのをみて、いよいよその思いを強くしたもの。しかし帰路同じ列車でこのアツシャと再会、こわごわ話しかけると喜んで相手になってくれ、話がはずんで上司のソ連国鉄マンから仕事の催促をうける程だった。彼女は卒業後教師となりイギリスに旅する日をたのしみに貯金しているのだという。

III イルクーツクで

さて約16時間の列車の旅が終り、ハバロフスクからジェット機（トウ 104）で約2時間後シベリヤ開発の拠点イルクーツク着。ホテル「シベリヤ」に落ち着き散歩に出るとすぐ近くにキーロフ広場があり、中央の噴水で兄弟らしいのが盛んに水遊びをしている。その子供たちの若い母親と、その姑が近くにいたので直ちに会話の練習をはじめる。「おばあさんは年金をもらっているのですか」「そうだ」「何をしていたのですか」「芸術家だ」予期せぬ答にまじまじと相手の顔を見つめる。たしかに上品で教養のありそうな白髪のおばあさんだ。「何の芸術ですか」「詩人だ」「何か好きな詩を暗誦してください」というとおばあさんは、とたんに生き生きとなり、時にはつまりながらも堂々と暗誦。そこで私も学生時代に好きだったブーンキンの「嵐」を暗誦、すっかりうちとけてしまった。こんどは、ほっそりしたフランス型のお嫁さんの方が「なんという美しさ、た

ぐいまれなその姿よ……」といった短い詩を聞かしてくれ、これは日本の詩だという。短い詩にしてはよくまとまり、要を得ているので感心したが、あとから和歌だということに気がつく。「いつロシア語を習ったのか」ということで「20年も前」と答え、更に興に乗って、同じくブーシキンのオネーギンの中の有名な一節「当時、私はもっと若く、多分もっと美しかったですよに……」というタチヤーナの台詞を、男性語尾に変えていうと大笑いとなった。これが今回のとびあるき旅行での一期一会とでもいうべき心のふれあいの中では最高のものだった。エルとエリの発音をおばあさんは一生懸命をおしてくれ、それを傍でみている子供二人がクスクス笑って、はては笑いこぼげだし、お母さんからたしなめられるなどなつかしい思い出。この気持のよい一家と別れてホテルに帰り、レストランで夕食をとる。近くのテーブルのロシア人夫妻に招かれ、ビールをよばれる。男の人が、自分はただの労働者だと前置きし、なにやらボンボンいいはじめる。さてまだ挨拶ぐらいの会話がやっとの私が、アルコールのはいい調子でまくし立てられ、理解に少々手間どるうちに、どうやら「サービス」について話していることがわかった。「ソ連のサービスは悪い。みてくれ、この女給は注文してもふりむきもしない。さき程君たちのテーブルのところで連絡していたのは誰か」「あれは私たち旅行団の世話をするソ連でいえばインツーリストだ」（近畿日本ツーリストの添乗員）という。「そうか、なんという立派な態度だ。サービスの気持が溢れていて、傍でみても全く気持がよい。エレンブルグの日本印象記を読んだが、日本ではどんなに少ないお釣でも1円たりと間違いなく持ってくるというではないか。それなのにこの女給といったら……」という具合。私は自分の聞きとり能力の貧弱さをかみしめながら、懸命にきき出した内容が内容だけに狼狽し、心配そうな奥さんの機嫌の悪さも読みとれ、「奥さん、この話はここで働いている人たちには面白くない話ですね」というと「勿論、そうですよ」という答、「では失礼させていただきますがよろしいですか」「どうぞ　どうぞ」ということでさっさと席を立ってしまった。

翌朝、バイカル湖観光、水中翼船ロケット号上で、アノラックに身をかため精悍な感じのモスクワ青年エフゲーニイと広島のことなど話し合う。広島の名は、ソ連では誰にでもよく知られており、こちらは被爆者だけに話しやすいし、第一むこうにきこうとする気持のあることがやや複雑な表現の合間を埋めてくれる。

船着場で「日本人、戦争、ドイツ……」などと英語らしいもので大男が問いかける。かといって英語で応じてはわかってくれない。そこでロシア語に切りかえると黙って口をもぐもぐさせている。奇妙なことだ。ロシア語がわからないはずはない。ブリヤートとかヤクートではなく、どこからみてもロシア人である。狐につままれたような又からかわれたような変な気がして、近くにいた高級船員風の人に「あの人にロシア語が通じないがどうしてだろう」と問いかけると、肩をすぼめて「

ビヤン」という。つまり酔払いということで拍子抜けがしてしまった。それから各地で酔払いをかなりみつけたけれど、日本とくらべると大変おとなしいというのがその特徴である。大体宙に浮いたような足どりでふわっと歩いている。大声でわめいたり、眼をすえて「ウーイ ウーイ」とうなったりする日本版とはたしかに「所かわれば品かわる」。

IV モスクワへ

イルクーツクより空路モスクワへ出発、途中オムスクで1時間給油、合計6時間半でモスクワドモデュードヴァ空航着。機中で隣り合わせた54才というパーヴェルさんはmanyに当る「ムノーゴ」を「ムノーホ」と発音する。あとでモスクワの連中にきいたり、発音辞典をみたりしても「ムノーゴ」である。シベリヤ方言であろう。この人から質問攻めにあったが、内容は物価のことが主だった。この時の印象をふくめて、ソ連では給与、住宅事情は私のような日本の一般庶民より悪まれているが消費物資とくに衣料が質量ともに貧弱であると思える。ワイシャツが4,000円以上するといった調子である。時速900軒、10,000米の高空を飛ぶ高性能のジェット機を下駄がわりに使う国がモータリゼーションといえば自転車にモーターをつけたカブの段階というちぐはぐさである。

モスクワ見学中、ナポレオンが「貞操を奪われた処女の如し」とかいったという雀が丘（現在レーニン丘）からモスクワ市街を俯瞰しながら、同じように見学中のピオネールの一団を引率する女子指導者の説明を立ち聞きしていると突然当の引率者から「東京タワーは何米か」とたずねられる。「エー333米」と答えると、我意を得たりとばかり、にっこりして「あのモスクワの新テレビ塔ができるまでは東京タワーが世界一でした。……」外国人を証人にしての説明に一層の拍車がかわったようであった。天に沖する宇宙飛行成功記念碑と、その下でガムやボールペンを欲しがる子供たちというちぐはぐさは、全体としては速いテンポでしかも懸命に生活水準向上努力中の1963年夏のソ連がもつ一面であった。

ギリシア行漫筆

関 本 至

昨年8月23日に羽田を発って、トルコ、ギリシア、イタリア、フランス、ドイツ、イギリスの6ヶ国を歴訪し、11月22日丁度3月ぶりで帰国しました。トルコのことは簡単ながら前号に書きましたので、今回は主にギリシアでの幾つかの思い出を記すことにしましょう。